

# 第三学年 国語科学習指導案

日時 平成二十九年十月二十七日(金)  
場所 岐阜市立加納中学校(三年五組教室)  
学級 三年五組(男子十八名・女子十七名 計三十五名)  
授業者 河合のぞみ

一、単元名「いにしへの心と語らう」 教材名「夏草―「おくのほそ道」から」 松尾芭蕉

## 二、単元および教材について

松尾芭蕉の「おくのほそ道」は、日本を代表する紀行文の一つで、江戸を出発して最終地の大垣に至るまでの、百五十日を超える旅の体験や見聞を記している。旅への出発前、旅の途中、旅からの帰着において出会った風景や人々との交流などが俳句とともに記されており、芭蕉のさまざまな思いが感じられる文章となっている。作品自体に芭蕉の生き方や人生そのものが表れているからこそ、三年生の古典の締めくくりとして示されており、芭蕉の生き方を知ること、自分の生き方を考える機会となると考える。さらに、この「おくのほそ道」の終着地点が岐阜県大垣市であり、生徒たちにとっては身近な土地に訪れた芭蕉の思いをより身近に感じることができると考える。

そこで、本単元のねらいを「歴史的な背景を踏まえて『おくのほそ道』に表れた芭蕉の生き方や思いを読み、作品をより身近に感じて芭蕉の見ていた世界に親しむことができる。」とし、作品をより広く、深く理解することができるようにする。

## 三、生徒の実態

「古典は得意である」という質問に対し、八十五%の生徒は「いいえ」と答えている。理由を見ると、現代と使い方が異なる言葉もあるため、自分の身近に引き寄せることができず、文章中に表れる考え方や思いも今の私たちと違うのだからという先入観にとらわれ、苦手意識を感じている生徒が多いことが分かった。そこで、前教材「君待つと―万葉・古今・新古今」では、和歌の表現や語句の使い方に着目して、和歌に表れた昔の人の心情や情景を読み取った。そのなかで、「秋」が「よみしき」を感じさせるなど、古典に表れた考え方や人々の生き方は、現代に生きる私たちと違う点ばかりでなく、同じ感覚や考え方もつ点もあるのだと気付くことができた。そこで、「夏草」においても現代で使われている言葉や歴史的な背景を手がかりに読み取って、自分の思いと比較し、古典を身近に感じ、親しみや学習する意義をもたせたい。また、「秋」が表す感じ方や心情だけでなく、全体交流を通して俳句の語句について焦点化していき、旅を終えた芭蕉の思いをより深めていきたい。

## 四、「生きてはたらく言語能力」の育成について

### 中学校学習指導要領解説 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(中) 第三学年より

ア 伝統的な言語文化に関する事項

(ア) 歴史的な背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。

### 「生きてはたらく言語能力」を具体化する

#### ―「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」学習指導要領―より

ア 伝統的な言語文化に関する事項

作品の当時の立場や置かれた状況等を知ることを通して、作品の世界を実感的に捉えている。

本教材では、学習指導要領の第三学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「歴史的な背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」を具体化して、言語活動「芭蕉の旅にどんな意味があったのかを考え、まとめる」を位置付ける。「おくのほそ道」に書かれた俳句に込められた思いを読み深めるためには、地の文に書かれている表現と俳句を結び付けることが重要である。それぞれの地で詠まれた俳句に込められた思いを読み深めることで、現代の私たちと変わらない点や違う点に気付き、古典の世界に親しむことができる。また、「おくのほそ道」を「旅立」から「平泉」、「大垣」の終着地点まで読み、芭蕉の旅の終わりを見届けることで、旅に対する自分たちの思いと芭蕉の思いをより比較することができる。本時では「大垣」を取り上げる。同じ岐阜県である「大垣」を取り上げること、古典の世界をより身近に捉えることができる。考えた。

五、研究とのかかわり 言語文化部会研究テーマより

言語文化に親しみ、生活につなげる能力の育成

～古典の世界を身近に感じる指導の工夫～

本教材では、「旅に懸けて俳句を詠んだ芭蕉の生き方をどう思うか、まとめる。」という活動を終末に位置付けた。「おくのほそ道」を終着地点である「大垣」まで読み深めることで、旅の始まりから終わりまでの芭蕉の思いに迫り、自分たちも芭蕉と同じように旅をしている感覚を味わわせたい。また、古典をより身近に感じさせることができる。と考える。「旅」を一つのキーワードとし、俳句を作るために旅に生きた芭蕉の思いと自分たちの旅に対する思いをそれぞれの場面で常に比較させることで、旅が人生そのものであった芭蕉の生き方に触れ、古典の世界を身近に感じることができるようになりたい。

六、単元指導計画（全六時間）

【単元のねらい】

・歴史的な背景や時代背景を踏まえて「おくのほそ道」に表れた芭蕉の生き方や思いを読むことで、作品をより身近に感じて芭蕉の見ていた世界に親しむことができる。

【単元の評価規準】

・歴史的背景や時代背景を踏まえ、芭蕉の生き方や思いを読み、古典の世界に親しんでいる。

時	ねらい（◎学習課題）	評価規準【指導事項】（評価方法）
1	<p>「おくのほそ道」の歴史的背景や松尾芭蕉について知る活動を通して、芭蕉やその作品に関心をもつことができる。</p> <p>◎現代の旅と芭蕉の旅は、どのように違うのだろうか。</p>	<p>芭蕉の作品に触れ、松尾芭蕉や芭蕉の作品に関心をもっている。</p> <p>【伝国（ア）】</p> <p>（ノートの記述・まとめ）</p>
2	<p>「おくのほそ道」の冒頭部分から、芭蕉の旅に対する思いや生き方を読み取る活動を通して、家を譲り渡してまで旅に出て俳句を読もうとした強い決意や覚悟に気付き、芭蕉の生き方に対する自分の考えをもつことができる。</p> <p>◎なぜ、芭蕉は家を譲ってまで旅に出たのだろうか。</p>	<p>冒頭部分を読み、芭蕉が家を譲ってまで俳句を詠もうとした生き方に対する自分の考えをもっている。</p> <p>【伝国（ア）】</p> <p>（ノートの記述・まとめ）</p>
3	<p>「おくのほそ道」の平泉を訪れた場面から、平泉の情景や芭蕉の思いを読み取る活動を通して、人の営みのはかなさに涙を流す芭蕉の思いに気付き、自然や人に対する芭蕉の思いと自分の思いを比較して考えをもつことができる。</p> <p>◎芭蕉は何を思っ涙を流したのだろうか。</p>	<p>平泉の前半部分を読み、芭蕉が雄大な自然を前にして人の営みの儚さに涙していることに對する自分の考えをもっている。</p> <p>【伝国（ア）】</p> <p>（ノートの記述・まとめ）</p>
4	<p>「おくのほそ道」の經堂と光堂を訪れた場面から、光堂の現存する美しさや芭蕉の思いを読み取る活動を通して、人によって守られる姿に感銘をうける芭蕉の思いに気付き、人の営みに対する芭蕉の思いと自分の思いを比較して考えをもつことができる。</p> <p>◎「降り残してや」と表現したのはなぜだろう。</p>	<p>平泉の後半部分を読み、芭蕉が美しく輝く光堂を前にして人の営みの偉大さに感動していることと對する自分の考えをもっている。</p> <p>【伝国（ア）】</p> <p>（ノートの記述・まとめ）</p>
5 （本時）	<p>「おくのほそ道」の大垣に着いた場面から、友人の労いや旅に對する芭蕉の思いを読み取る活動を通して、旅はこれからも続いていくと考えている芭蕉の思いに気付き、旅に對する芭蕉の思いと自分の思いを比較して考えをもつことができる。</p> <p>◎旅を終えた芭蕉はどのような思いで俳句を詠んだのか。</p>	<p>大垣」を読み、芭蕉が旅の終わりの大垣でも次の旅に思いをはせていることに對する自分の考えをもっている。</p> <p>【伝国（ア）】</p> <p>（ノートの記述・まとめ）</p>
6	<p>「おくのほそ道」のすべての旅程を振り返り、旅に懸けて俳句を詠んだ芭蕉の生き方をどう思うか、まとめる。</p> <p>◎芭蕉の生き方から、自分につなげたいことはどんなことか。</p>	<p>「おくのほそ道」を振り返り、芭蕉の生き方をまとめる。</p> <p>【伝国（ア）】（プリントの記述）</p>

七、本時のねらい

「おくのほそ道」の大垣に着いた場面から、友人の労いや旅の終わりに対する芭蕉の思いを読み取る活動を通して、旅が終わるのでなくこれからも続いていくと考えている芭蕉の思いに気付き、旅に対する芭蕉の思いと自分の思いを比較して考えをもつことができる。

八、本時の展開（五／六）

	学習活動	指導・援助
導入	<p>◇これまでの学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>旅の始まりと旅の途中の芭蕉の思いを読んできた。</li> <li>今日は、旅の終わりで、これまでの思いがどのように終わっていくのだろうか。</li> </ul> <p>◇本時の課題を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまで学習してきた芭蕉と自分との思いを比較してきたことを思い出し、旅程を振り返る。</li> </ul>
展開	<p>大垣で旅を終えた芭蕉はどのような思いで俳句を詠んだのだろうか。</p> <p>◇全体で「大垣」を音読し、芭蕉の思いを読み取る。</p> <p>【「大垣」の地の文から】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>たくさんの弟子や友人の名が出てくる。旅の終わりを迎えてもらうてうれいのだと思う。</li> <li>昼となく夜となく訪れているので、本当にたくさんの人が無事を喜んでいたことが分かる。芭蕉がうれしく感じていると思う。</li> <li>生き返ったものに会うようにとあるので、それだけ長く危険な旅で、ほっとしていると思う。</li> </ul> <p>【俳句「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」から】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>たくさんの人と別れて、二見が浦に向かうのをさみしく感じていることが分かる。</li> <li>旅立ちの時は、春だったけど、旅の終わりは秋となっていて、旅の終わりの寂しさが込められている。</li> <li>切れ字が「ぞ」とあり、寂しさを強調している。</li> </ul> <p>◇主発問をして課題を焦点化する。</p> <p>「大垣」という土地の俳句を詠んでいないのはなぜだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>歴史的仮名遣いや俳句の表現技法に注意して読むように伝える。</li> <li>切れ字、季語などを確認し、伝わってくる芭蕉の思いを書くよう伝える。特に「秋」に着目させ、秋から想起することや、なぜ芭蕉が秋を用いたのかという理由を書くように伝える。</li> <li>旅立「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の俳句を思い出して、比較する。</li> <li>「おくのほそ道」の地図から、長い旅を終えた後、どのような気持ちになるかを想像する。</li> <li>「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の辞世の句から、芭蕉の思いを想像するように伝える。</li> <li>大垣に関する資料を提示しておき、歴史的背景や時代背景に着目して読むことができるようにする。</li> </ul>
終末	<p>◇本時の芭蕉の思いと自分の思いと比較してまとめを書く。</p>	<p>【評価規準】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大垣を読み、芭蕉が旅の終わりの大垣でも次の旅に思いをはせていることに対する自分の考えをもっている。</li> </ul> <p>（ノートの記述・まとめ）</p>
	<p>命をかけて旅をした芭蕉は大垣までたどり着いた達成感をもっていた。しかしそれだけではなく、今回の授業を通して、まだまだ芭蕉の旅は終わらないのだということを読み取った。自分だったら、友人が迎えてくれてほっとしてどまりたいと思うけれど、疲れが取れる前に旅立つ芭蕉の決意を知って、俳句の道を究めようとする芭蕉の強い決意に感動した。春に旅立ち秋に終わった「おくのほそ道」だけど、実際に見てきたからこそ、たくさんの俳句を残せたのだと思う。</p>	